

## 生活科研究の授業履歴と省察 (2)

野崎 武司

(体育科教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

### The Transcription and Consideration of 'Life Environment Research' (2)

Nozaki Takeshi

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu, 760-8522

**要 旨** 複数教科複数教員が関わりながら授業を展開してきた「生活科研究」のこれまでの経緯を振り返りながら、筆者自身が学んできたことを中心に省察を試みる。体験学習の魅力は、新たなコミュニケーション（気づき）が、新しいディスコースを生み出し、自己を取り巻く世界と自己自身が刷新されるような体験にあると考える。筆者は、1999-2005の間、「生活科研究」に関わる中で、学生たちを有意義な体験学習へ導く努力をしてきたのであるが、それは同時に筆者自身の自己の変容を導くものでもあった。ここで体験した筆者の省察は、新たな教員養成を開く一つの契機になると考える。

**キーワード** 能動的な学習、体験学習、ディスコース、学生教育

#### 1. はじめに

筆者は1998年、教育学部の改組に伴うカリキュラム改革に対応して、学校教育入門、および生活科研究の授業作りに関わることとなった。学部の大きな改変期であり、またいわゆる新学習指導要領の導入が迫る時期でもあり、教員養成カリキュラムの大胆な転換が要請されていた。それまで教科を柱とした講座の中で活動してきた筆者にとって、「自らが変わらなければならない」という観念に切迫されはじめた時期であった。

「生活科」は、子どもの遊びも包括する大きな教科であるから、体育の先生も協力してくださいと、当時生活科主任であった川勝教官（理科教育）にお誘いをうけた。体育科教育の中で

も、身体論を柱に子どもの創造的な活動を重視する立場で研究を進めていた筆者は、鳥山敏子など、体育の範疇を超えた幅広い教育実践活動に深い興味をいだいていた。新しい教員養成へ向けて自己の変革を期していた筆者にとって、「生活科」への関わりは大きな契機となるだろうと思われた。

実体験を希薄化させ、数理処理中心と化した理科教育、また同様に暗記科目化した社会科教育、実際筆者は、そうした学校教育を経てきており、そうしたもののへの反感のようなものを内奥に抱えていたように思われる。生活科が、実体験（五感の働き）を重視し、現象の内側からものごとに迫り、子どもたちの探究心をかき立てる教科であることを学ぶ中で、筆者の興味も深まる一方であった。特に、川勝教官からは、

ドイツにおける環境学習など、多彩な知見を教えていただいた。「生活科」の語源は“Lebens Welt”にあり、いわば現象学的な生活世界に根ざしていること、それゆえ、「生活科」では、子どもの自由な活動から、そこに新たな生活世界を開くことを体験させることが重要であること等々、数回のミーティングと若干の文献講読で筆者の「生活科」の理解はにわかに深まることとなった。

こうして筆者は学部の授業「生活科研究」へ関わることとなった。その後の活動の積み重ねは、学生というナマな存在に出会う体験であったと思う。講義と大きく異なり、体験学習が柱となる生活科研究の授業は、教員の思惑通りには展開しない。また学生も、ただ講義を受けるばかりでなく、自ら活動し自らの五感の体験を披露することが求められる。そこには、「自分をさらけ出す」といった契機が必要となる。教員も学生も、通常の講義とは全く異なる関わり方が要請されるのである。筆者にとって生活科研究の授業体験は、決して順風満帆なものではなかった。こうした筆者の試行錯誤は、「生活科」のイメージを変えて行くこととなった。それは同時に、筆者の学生との関わり方のスタイルまでも変えることとなった。

本研究の目的は、約7年間にわたる生活科研究の取り組みを省察することにより、体験を柱とした大学教育の可能性を探るとともに、その効果的な授業作りの方策を整理することにある。これは新しい教員養成を開く一つの糸口ともなると考える。

## 2. 99年「生活科合宿」の経験

筆者は、98年の打ち合わせに基づいて、99年に初めて生活科研究の小豆島合宿に参加することとなった。その詳細は、安東（2005）に要約されている。しかし筆者にとっての生活科合宿は安東の結論とは若干異なるものとして、感受された。安東は、自由な学生の活動、たとえそれが無計画なものであっても、肯定的に受け止めることができたとしている。それは複雑な現

代社会では「予見を持たないところから新たに見えてくることを捉える力こそが課題を解決していく手がかりになる」からであるという。筆者は、こうした学生の予見を持たない自由な活動を柱とする合宿に、ある種の異和感を覚えた。

その異和感は、一つには筆者が根っからの体育教師であることに由来していたと思われる。これまで筆者が体験してきた合宿は、水泳実習や登山・キャンプ、スキー実習など、事前に綿密な計画が立てられ、達成すべき課題が明確で、規律正しい生活をもって、それを実現しようとするものであった。極端には、トイレでのスリッパの並べ方から注意を促すような合宿ばかりを経験してきた。そうした筆者にとって、「生活科合宿」はルーズなものに思われたのである。

異和感の由来のもう一点は、受講した学生たちは、どこまで満足感を得たのかという疑問にあった。体育の合宿では、必ず「苦勞して大きなことをやり遂げた！」という充実感と疲労感が残るよう、合宿全体が入念に仕組まれるのが通常であった。それに比して、「生活科合宿」では、もちろん様々な場（探求のきっかけ作りや様々な交流活動）の提供はあったものの、授業の成否の大半は、学生の取り組み如何にかかっていたのである。いわば、学生はいくらでも手が抜ける状況の中で、教師がアプローチできる部分があまりに少なく感じたのである。

こうした感性は、裏目にも働いた。合宿は学生リーダーが柱となって展開していたが、その統率力の乏しさについて筆者がしゃしゃりでて、全体を指揮することもしばしばあった（3年目の合宿で「野崎さん、もっと学生の活躍を待ってあげなさい」と川勝先生に叱咤された）。今思えば、学生リーダーの面子を潰すことをやったのだと反省する。

しかし、当時鳥山敏子の教育実践に憧れていた筆者は、自由な活動を柱とする「生活科合宿」を物足りなく感じ、教師としてもっと学生に関わる方途はないものか、悩ましく感じたのである。

### 3. 学生の変容に出会う

教師と学生との関わりの中で、何かしら創造的な活動ができないものか模索していた筆者は、数々の失敗を重ねた。後期の授業、校内で行う生活科学研究において、石清尾八幡の由来を調べ、そこで拾った木の実や小枝でクリスマスリースを作ってきた女子学生のグループに「生活科で求められているのは、そんな調べ学習じゃない！ 五感を働かせるってことを履き違えている！」と叱咤した。それ以降、そのグループの女子学生とはうまくコミュニケーションをとれなくなった。その授業に居合わせた体育の学生に「あんなにまじめに活動して、あんなに丁寧な作品を作ってきたのに！」と咎めるように言われたことを鮮明に覚えている。努力しさえすればいい、という気持ちは全くないが、こちらは何がどう悪いのか、明確に掴めないうまに、ただ学生を叱るばかりではいけないと痛感させられた。

その後も同様な経験は数々あった。「今どきの子ども」をテーマに探求したグループのある学生は「テレビゲームの影響で…」と当初からの視点を最後まで貫いた。現職の大学院生との懇談や、子どもたちと遊ぶという実体験の場を準備し、筆者から見れば興味深い内容が確かにその学生の耳に入ったように思えたのに、その後日のまとめでは、そうした内容の大半は拾われることなく、「テレビゲーム影響で…」という通俗的な内容が反復されたのである。これは決して悪意に基づくものではなかった。今の学生たちに何かが足りない、生活科学研究にはもっと違ったアプローチの可能性はあるはずだ、筆者にはそう感じられた。

いわば、安東の結論は、的を得ているのである。学生たちは、目の前の現象とは超越した観察者として独立していて、その観察者の視角である予見は、体験活動を通じて変容するものでなく、一貫して貫かれるべきものとして保持される。いわば観念（予見）に囚われた主体（観察者）は、いかなる体験にも揺さぶられることなく、一貫してしまうのである。それこそが探求

活動であるというスタイルが身体に染み付いている。筆者が苛立つほどに痛感したのは、こうした学生たちの身体的作用（こうした予見の働きは、学生の自覚的なものではなく、無自覚に作動する身体的作用）であった。こうした学生の頑なな構えは、自由に探求させる、というアプローチだけでは、決して解くことはできないと思われた。

筆者の大きな転機は、2001年後期の生活科学研究であった。あるグループが「自動販売機」をテーマに探求することを決めた。当初、大学近辺の散策から、独自のマップをつくり、どこにどんな種類の自販機があったかを記載して、私のところに持ってきた。グループ発表を前にしての取り組みであった。丹念に調べたことはすぐに伝わってくるのだが、正直言って面白くないことを告げた。どこの通りにどんな自販機が多いか、傾向を示したいようであったが、それも明確には示し得ていなかった。探求する主体が、目の前の現象に超越した立場に関わろうとする典型であった。そこで筆者は、もっと素朴な疑問から探求を始めようと持ちかけた。例えば、自動販売機の電気料金は誰が払っているのか等。彼らは大学近辺の酒屋さんを訪問し、直接インタビューすることへ踏み出した。「商店をやっていると『自販機をおいてもらえないか』というセールスが頻繁にやってくる」「自販機の収益が月1万円とすると、電気代など諸経費でほぼ相殺されること」「夏は日当たりいい場所に機械を置くとクーラーで電気代が跳ね上がる」「自販機には、コカコーラなど製造会社が提供するものだけでなく、企画会社が複数の製造会社の売れ筋の商品をアレンジして提供するものもあること」「缶ジュースにはそれぞれ賞味期限があり、売れないものは随時廃棄され、特にホットの缶コーヒーは、3日ほどで中味が変質するらしく、廃棄のサイクルが早いこと」などを聞き出してきた。

勢いづいた彼らは、複数の商店にインタビューに行き、「自販機があると、夜の店の警備にもなること」「クーラーの中で一日を過ごすタクシーの運転手さんが、夏でもホットの商

品を買いにくるので、その人のために全部を冷たい商品にしないでいること」などから、自販機という機械的な商品の裏に人間的な関係がある、と大きなコメントを加えた。さらに彼らは、自販機の企画会社（四国カスタマーサービス）に赴き、自販機のリサイクルや内部機械の技術革新の早さ等、興味深い知見を集積して見事な発表に鍛え上げた。（資料1を参照）

筆者にしては面食らう思いであった。当初あれだけ頑なであった彼らが、何かしらのコツを掴むことで、急激に活動を変貌させたからである。その契機は、直接商店経営者とコミュニケーションすることであった。それは、普段の世界とは全く異なる世界へと彼らが切り開かれること、その体験の中でそれまでの彼らの世界の見方（予見）が大きく変貌すること、いわば新しいディスコースに開かれること（注1）であったと言えるだろう。学生たちは、一度この味をしめると、教師の手を必要とせず自ら主体的に活動を展開させ始めるのである。

筆者がこの経験を通じて自覚できたことは、筆者も含めて我々は普段、日常生活のディスコースに埋没しているということ、特に学生たちは彼ら固有のメディア（テレビや漫画やゲームなど）の垂れ流す観念に呪縛されたディスコースを生きているということであった。学生という主体は、学生をとりまく若者文化が織りなす言語的実践の産物にすぎない。彼らが興味を深められる形で、普段と異なるコミュニケーションへと彼らを切り開いてやることができれば、彼らは自ら、自分自身を組みかえていくのではないか、筆者にはそのように感じられた。

#### 4. ディスコース形成へと導く

学生を新しいディスコースへと導く方途で、最も単純なものは、昨年までの成果を示すことであった。「自販機グループ」の発表ビデオを見せて、彼らがどのようなきっかけで活動を展開し始めたかを簡単にコメントするだけで、学生たちは活動のヒントを掴むようになった。

また岡田みゆき教官の提案で、小学校の生活

科で行われている実践的な手法を大学の生活科学研究でも導入してみるということとなった。からだを使った遊び、季節を感じる試み、大学探検、町探検、こうしたステップを踏みながら、最終的に学生の自由研究につなげようという形ができてきた。

2003年前期の生活科学研究における町探検では、多くのグループが興味深いミニレポートを提出してきた。街でおいしいアイスクリーム（Ottimo）を見つけた二人の女子学生は、その製造工場に赴き、「想像していたより小さな機械で製造されていたこと」「『大自然の恵みさえあれば何でもアイスにする』という取締役さんは、元銀行員だったこと」「工場は多くて7～8人ですべて手作業、皮むきもみんな『よいどん』で始めること」「添加物をできるだけ入れないでおいしいアイスをつくることに賭けていること」などを聞き出して、コンパクトにまとめてみせた。（資料2を参照）

この報告が新鮮に感じられたのは、記事のディテールの面白さだけに還元できない。彼女たちの報告が、学生が通常想定してしまう大人の社会のイメージとは大きく隔たったものを探り当てたことこそが大きな意味を持っていたと思う。学生たちは、通常月収や年収でまず就職先を考えてしまう。そんな学生的な世界の見方を塗り替えるような報告に仕上がっていたのである。

2003年前期の生活科学研究は、筆者のわがまを聞いてもらい、「私の来歴を見つめ直そう！」を3コマ分の単元としてやらせてもらった。

第1回目、グループ内で、子どもの頃好きだったこと、楽しかったことなどを思い出し、自分がどんな子どもだったかを交流する。交流のあとで自分自身の子どもの頃について再認識したことを整理する。次回までの宿題として、保護者、祖父母、兄弟姉妹、いとこなど小さい頃に交流のあった人たちとできるだけたくさん交流し、小さい頃の自分を振り返ってくる（幼い頃の写真や記念品などを持ってくる）ことを指示。

第2回目、グループ内で、宿題に関連して交

流してきたことを出し合って、全体に感じたことをグループ発表として準備する。

第3回目、全体交流会と反省。こうした内容を、学習ノートまで作る形で展開した。

受講生の中には、子どもの頃のことは振り返りたくないという素振りの者が数名いた。しかし多くの学生は、印象深い報告をしてくれた。まず女子学生に、子どもの頃の父親との親密さに驚きを表明する報告が多かった。「私の家庭は父が17時半に帰ってくる家庭だったので、毎日父と夕方に近くのグランドに行って遊んだり散歩したりした。幼い頃は父との思い出が強い」「母によれば、父は私が泣くまで遊んでくれたそうだが・・・思った以上に父との思い出がある」「父によれば、小さい頃自分で自分のことをしたがって、何でも『わたしがする！わたしがする！』と父を困らせたそうだが」「小さい頃、父と寝るのが大好きで、いつも父の背中の上に乗って寝ていた。ある日父の背中でおねしょをしてしまい、父は驚いたそうだが」等。女子学生にとっては、現在の父との関係と幼少期のそれとの格差が最も実感されやすいようであった。

その他、自分が如何に暴れん坊やおてんばであったかを振り返るエピソードもたくさんあった。最も印象的であったのは、自分が如何に大事にされてきたかを振り返るものであった。「私が二歳のとき、遊んでいて指に大きな怪我をして、父は病院で『麻酔をして手術するか、麻酔なしで行うか』究極の選択を迫られたそうだが」「私は長女だけど、実は私には兄がいて、その兄は産まれてすぐ亡くなった。両親はその兄にもちゃんと名前をつけて、私が産まれたとき、兄の名の一字をとって、私に命名した」

両親にとって私は貴重な存在であった、という振り返りは、周囲の空気を深く和ませる力を持っていた。

筆者の「私の来歴を見つめ直そう！」は、教師側の仕掛けが強すぎるという点で、周囲の教官スタッフからの評価は低かった。しかし筆者としては、若者文化のディスコースにどっぷり漬かった学生たちを、異なる回路のコミュニケーションに開き、新しい主体性へと導く一つ

の試みとして、成功したのではないかと捉えている。

## 5. 生活科研究を通じて学んできたこと

筆者は本稿の前半に、生活科の小豆島合宿を半ば否定的に記述した。しかし学生たちの自由な活動を大幅に許容することを柱にした生活科合宿においても、印象深い研究発表は確かにあった。たとえば、天体観測グループの報告では、「土星や木星を見つけ出すことが大変であること」「10人がそれぞれ探しながら、誰かが見つけても、それを数人が回し見るうちにファインダーからいなくなること」こうした報告から、地球の自転という大きなものをありありと実感する喜びが感じられた。こうした報告を生み出すために、教官サイドは何もしなかった訳ではないだろう。しかし、当時の教官サイドの関わり方として、明確に自覚的に押さえていたことは、「学生の自由を保障すること」のみであった。それ以外は、状況的に生成する教師と学生のやりとりを展開する以外に術がなかった。

術をもたなかった筆者は、生活科研究の試行錯誤を経験するなかで、半ば無自覚ではありながらも、学生との関わり方のスタイルを身につけてきたように思われる。まず明確に自覚化されてきたことは、学生たちが彼ら固有のディスコースに囚われており、その中で彼らの根底的な欲望も、日々の対話も、世界の見方も、将来の展望も、すっかり水路づけられているということであった。そうしたディスコースこそが、外部への関わりを敬遠させ、半ば若者文化への閉じこもりのような現象を生じさせている。学生たちが生活科研究での生き生きとした報告を阻害している要因は、極めて根の深いものであると感じられた。

こうした問題に対する筆者の関わり方のスタイルは、ある種のボディワークとなった。身体のこわばりを解いて、瑞々しい身体感覚を開いてあげることで、そこにおいて感じる力を恢復する体験を味わうことである。2004年の後期の生

活科学研究では、台風明けの香東川で泥遊びを行った。明文化された資料は残されていないが、子ども時代の感覚を取り戻すような、生き生きとした姿を確認できた。



2005年の前期では、石清尾神社で「見えないものを見る／聞こえないものを聞く」というワークを試みた。境内に集まって、肩たたきから、ふれあいゲームなどを展開し、二人組で手首の脈、首筋の脈を探らせた。脈に触れるだけで、血液の流れ、心臓の鼓動、脳へ血が通っていること、ひいては命の儚さのようなものまで目前に感じられることを引き出した。触れるというだけで、普通に見ている世界とは異なるものが現れることを確認し、神社周辺で「見えないものを見る／聞こえないものを聞く」を試みさせた。20分くらいの散策ののち、集まってグループ討議し、全体発表を行った。「普段から雀や鳩は身近にいるはずなのに久しぶりにさえずりを聞いた気がする」「普段この近所で食事したり買い物したりしているけど、猫や鳥や亀や木々、みんなひっそりここで生活しているのだと思った」「この大きな柱もずっと昔の誰かが運んできたんだなと思った」「葉っぱの落ちる音まで響くような静けさとゆったりした時間を感じた」「門をくぐっただけで聖域に入るという気がした」「苔むした石造りの盤盥の水は、きっと水道水なのだろうけど、神聖な気がした」等々、短時間で学生は「感じる」ということをしっかり対象化して捉えることができるようになった。例えば、誰もが聖域を気分として感じているにも関わらず、それを言語で捕捉して、自覚的に意識化することは難しいと実感できたのである。身体が感じていることと、意識

的内容（観念や予見）との大きな分離、からだ  
と頭の分化、自らの内にそうした分化が作用していることをはっきり自覚すること、そのことが、体験学習というものにとって、極めて重要なことであると考えようになった。このことが筆者の生活科学研究を通じて学んだことの大きな柱である。



こうした「意識と感覚の乖離」を対象化することを軸に、学校探検や町探検を展開することで、半ば学生たちが、自ら自身のディスコースに気づき始めるという成果を得ることができた。

2004年の前期の生活科学研究での「しょうゆ豆」の研究グループは、工場を訪問し、様々に興味深い内容を掘み出してきた。「社長は若い頃大陸に従軍し、香川に帰ってきてても職がなく、数々の仕事を遍歴したこと」「大鍋一つでしょうゆ豆づくりを始め、試行錯誤のうち少しずつ売れるようになり、道具も工場も拡大してきたこと」「現在のしょうゆ豆はすべて中国産のそら豆を使用していること」「炒り加減と独自のタレが秘訣であること」「現在しょうゆ豆組合の長も勤め、様々な表彰を受けてきたこと」「若者向けにピーちゃん豆など新製品の開発にも力を入れていること」等々。筆者にしては、戦争や貧困といった重いテーマが印象に残ったが、学生たちは軽やかに生き生きとした報告にまとめあげた。そんな彼らのレポートをここに引用する。

「生活科学研究では、最初の授業から最後の授業まで人との関わりがとても大きい授業であった。人との関わりのおもしろさ、そしてその中で自分を出して行くことの大切さを学んだ。・・・黒川さんのすてき

な人柄を感じることができた。私は今まで黒川さんのような立場の人物と接する機会がなかった。自分と全く違う境遇、年齢の人と話したり、関わったりするのは苦手であった。しかし今回黒川さんと出会い、目からウロコが落ちた。・・・班での行動も、最初のうちは慣れない人同士というのもあり、なかなかうまくいかなかった。私はあまり意見を出せずもどかしい思いもあった。だが発表のまとめ、資料作りの段階になり、少しずつ思いを強く述べていった。最後にできたものは、自分たちの満足のいくものになったし、とてもよい経験になった」

「私は初め、生活科研究の授業のことをめんどくさいなあ、と感じていました。グループに分かれてゲームとか、学校周辺の探検へ行くのもめんどくさいと思っていました。でも実際に学校周辺の探検に行ってみると、いつもなら見逃してしまうようなことまで見れたり、気づくことができ、楽しかったです。・・・実際、社長さんに会って、すごい人だと思いました。社長さんは自分の生き方に自信を持っているのだと感じました。・・・昔の小さな工場からどんどん機械が増えて大きな工場になったというのを聞き、日々の地道な努力に感心しました。・・・私も社長さんのように、自分のしている仕事に誇りを持てるようになりたいと思いました」

「正直言って、先生が適当にグループ分けをしたときは『今までしゃべったこともない人と一緒に活動していくなんてしんどいなあ』と思い、やる気はありませんでした。学校探検、学校周辺探検、高松市探検、どれも行き先に迷い、なかなかスムーズには決まりませんでした。・・・私はしょうゆ豆の工場で、黒川さんの人生、人情、しょうゆ豆に対する熱意などを実感しました。・・・この探検で、私たちは自ら知ろうという思いを持ち、その思いを実現させるため工場に連絡を取っておいたり、どのように探検していくか決めたり、と自主的に活動しました。授業のはじめの頃は知らない人と活動するなんて面倒くさいと思っていましたが、いつの間にか仲良くなり、同じ疑問や興味をもって共に頑張っていました。いつも持っている物に対するイメージを打ち壊す発見をし、すごいと感動し、そういう体験をすることがすごく楽しかったように思います。生活科の授業で、主体的に動くこと、発見すること、いろいろな人と

コミュニケーションすることの大切さを学びました。教師になったら、子どもたちの驚きや感動に共感できるようにになりたいです」

「今回の黒川加工食品の見学では、主に社長の人柄に触れたが、社長からいろんなことを学べたのは言うまでもなく、普段分かっているようで分かっていない『努力、挑戦、忍耐、こだわり、全力』などという曖昧な言葉の意味を、私たちに再認識させてくれたように思う。しょうゆ豆の研究をするにあたって、べたべたの『香川特産物体験活動』になるかと不安になっていたが、この体験は、完全に成功を収めたといって間違いのないと思う。『人』と『人』とのつながりをあなどってはいけないと深く心に刻んだ一日だった」

以上のレポートには、彼ら自身が固有のディスコースに取り囲まれていた、という明確な気づき、自己の再認識を確認することができる。彼らの活動が輝かしく見えるのは、当初彼らの意識を呪縛していた予見が、主体的な体験活動を通じて大きく変貌したことにある。意識の水準の予見を解体しているのは、コミュニケーションを通じて「感じること」「共感すること」であり、それが有無を言わさぬ真性なりアリティを開示させている。



筆者の抱えていた問題は、探求する主体が、目の前の現象とは超越した観察者として独立し、その観察者の視角である予見は、体験活動を通じて変容するものでなく、一貫して貫かれるべきものとして保持されるという事態であった。こうした事態を解体する一つの糸口として、筆者が会得してきた関わり方のスタイルは、学生たちに、「意識と感覚の乖離」に気づかせるこ

とであり、それを基軸に探求を進めさせることであったといえよう。

## 6. まとめ

「生活科」は、五感の働きを重視し、身近かな自然や社会や人々に主体的に関わることを通して、体験したことを表現していく教科である。旧来の主要教科は、近代的理性や近代の主体を暗黙のうちに前提し、絶対的なものとして想定される自己の、その世界認識を体系的に組み上げていくことを目指していたといえよう。これに対して、生活科は全く対象的な教科である。体験（コミュニケーションや関わり、気づき）を基軸に、既存の自己（予見）が揺さぶられ、未知の領野へ切り開かれることが期待されているといえよう。「体験をすること」の面白さとは、「感じることを通して、自己が新たな世界へ超出することにこそある。本論が捉えてきた主体とは、決して絶対的なものではなく、むしろディスコースの中での言語的实践の産物であった。元来社会的な産物である自己が、新たなコミュニケーションの回路を開くことで、新たなディスコース（新しい言葉で語り合う世界）を開くこと、これこそが、生活科という教科の醍醐味であると考ええる。

こうした生活科の醍醐味を引き出すには、「意識していること」と「感じていること」との間の乖離にまず気づかせること、さらにその狭間を埋めて、「感じていること」を「意識していること」へと還流させる回路を広げていくように、授業計画を方向づけることが重要であ

ることを確かめてきた。

最後に、7年間の生活科学研究での経験から、大学教員自らが固有のディスコースに囚われていると感じずにはいらなかった。教員採用率を柱とした大学間競争が全面に打ち出され、学生をそうした競争の材料としてしか見ないようなディスコースが蔓延しているように感じた。学生たちと共に様々な立場の人々と交流を持つとき、実は自ら自身の世界観の狭小さに驚かされることが多々あった。人の生き様に学ぶ学生たちの姿を見ながら、そうした学生の生きた学びを抑圧しているのは、実はこの大学という仕組みではないかと感じるときもあった。我々大学側こそが、学生を教育するということの予見を超克する必要があるのではないか。

### 注

（注1）ディスコースに関しては、拙稿、野崎（2005）を参照。

### 文献

- 安東恭一郎（2005）「生活科学研究の授業履歴と省察」  
『香川大学教育実践総合研究』No.11  
野崎武司（2005）「ディスコース形成としての『教え-学び』の実践について」『教科教育学研究』第23集 pp.27-39  
1999年・生活科学研究レポート集 香川大学教育学部  
2000年・生活科学研究レポート集 香川大学教育学部  
2001年・生活科学研究レポート集 香川大学教育学部  
2002年・生活科学研究レポート集 香川大学教育学部  
2003年・生活科学研究レポート集 香川大学教育学部  
2004年・生活科学研究レポート集 香川大学教育学部

# 自販機は産廃!!?

四国カスター・

サービスで

16 班王

発行所  
香川県高松市  
幸町1番1号

四国カスタマー・サービス会議室(2001/1/10)

会議室での5人対談

[illegible][illegible][illegible][illegible]

マー・サービスで

卷一

新聞

16期星

・安部千尋  
・小堀勝白  
・溝淵惠輔

發行所

香川高松市  
幸町一番地

[illegible][illegible]

現在、マスコミ上では鎮靜化しているが、近年、種分と暴落つて大きな被害を受けて、今では、すっかり対策が整つた硬貨の大きな、重さ、材質からそれらが「正貨幣」、つまりニセモノでない貨幣である。しかし、つまり、自衛隊が先述の4つの値が、登録された通りが日常、使つてもよい、確たる個所をゼロパーセントで、凌越五百円と硬貨は、韓国の硬貨である五百円と

**OASIS SHOP**

合理化を追求した  
次世代型自動販売機  
満を持して登場！  
これ一台であふれる笑顔！

旨い物を選ぶ

①各社有名ブランドの売れ筋を集めて  
販売する事が出来ます（売向上上に！）

②バリエーションは様々、あなたの好みの  
自販機が出来ます（わがままOK！）

③小スペースによる空間確保と  
電気代節約にどうぞ（ムダは節約！）

**OASIS★SHOP**は「あなた」  
という可能性にチャレンジします！

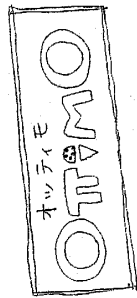
だ。見方はかなり違ってくる  
けれども、こうした「森」な  
温かさが感じられるよう

なるよとした工夫が、消費  
者にとっては何より嬉しいのだ  
よう。

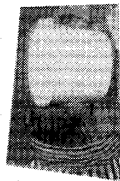
反統を辞かに象徴して来  
た自販機に目を向けよう。

[illegible][illegible][illegible]

いぢ



いぢ



取材地：オツティモ 紙野センター 資料2

取材日：六月二十二日（日）

取材に答えてくれたのは、代表取締役  
飯間 広一郎さん

私達は、オツティモ高松天満屋店に紹介  
していただき、主に各店のアイスを作っている  
オツティモ紙野センターへ行ってきました。想像  
していたよりも小さな機械で製造しており、  
私達が訪れた時間は三人の手作業による  
メロンアイスが作られていました。

いよいよ質問開始です。

新製品についてはお考えですか？

新製品...というよりも今のアイスは、素材  
を楽しむことが一番だからねえ。今は約  
三〇〇種類ものアイスがあるね。大自然の  
恵みさえあれば、何でもアイスにしてみよう  
よ。ゆ。色をつけるのではないからね。例  
えば、このシールを見てみて。

これは、桃のシールベットのなんだ  
けど、なんと原材料は桃  
と砂糖の二つだけなんだよ。

え〜っ!!

ねっ、すごいでしょ。おじさん昔は  
銀行員だったから、アイスの知  
識あんまりないんよ。もう、そのまんま。  
「こちちこちち」するのは嫌いだからね。その素  
朴さが意外良かったのかもね。

ベター。以外です。たった二つの材料でおいし  
いアイスができるなんて。でも、二人な少人  
数で毎日作られているんですか？

えっ、うだねえ。多くて七〜八人。これがミソ。一  
すべて手作業。手作業じゃなきゃできない。  
皮をむくのも、みんなが「よいしょン〜」だよ。

種別	氷菓
原材料	砂糖、桃
販売先	グリーンピア西山崎 111087-885, 6996
内容量	146ml

そう、ちょっと待っててよ。

これ、食べてみて。

ありがとうございます。いただきます。  
あ、甘い！何やるの...

しょうゆ豆だよ。

あ、そうそう。後味が最高だね。

おもしろいやる。最近では、豆、ねき、夢  
アイス、というのも作ってるよ。観音寺の  
砂アイス、曲豆沢の利木、丸亀の山桃、宇多  
津の塩など、地域の特産物をアイスにね。  
えっ、次、ゴヤアイス食べてみよ。大丈夫。  
アイスは太るって思ってるかもしれない  
けど、実は太りにくいんだよ。冷たいアイ  
スを食べる事により、体温が下がり、あげ  
ようとしてカロリーを多く使うんだよ。だか  
ら食べて食べて。

結局私達は、その後モバニ、桃、みそ、グ  
ラフフルーツ、できたてのメロン、をいただき計  
七種類ものアイスを食べる事ができまし  
た。ごちそうさまでした。今回、取材に行き、  
オツティモさんみんなの自分たちのアイスに  
かける情熱を教えてもらった気がします。  
本当に作ることを楽し  
んでいました。これから  
ますますアイスが食  
べなくなるこの季節、  
「おいしいもの」よろ  
しくお願ひします。

